

論文内容の要旨

(別紙1-1)

|   |                |
|---|----------------|
| 氏名  | 平山 幸乃          |
| 論文題目  | オクタビオ・パスの他者の探究 |
| 要 旨   |                |
| <p>本論文は、メキシコの作家オクタビオ・パス (Octavio Paz, 1914-1998) が詩論や評論の中で用いている他者という概念をめぐるの論考である。パスは現代メキシコを代表する詩人、思想家、外交官であり、1981年にはスペイン語圏で最も権威のある文学賞セルバンテス賞を、1990年にはノーベル文学賞を受賞している。パスは詩論や評論で頻りに他者という概念に言及しているが、それにも拘らず、パスの言う他者とは何か、という問題を主題化して論じた先行研究は極めて少ない。パスに関する研究は、そのほとんどが、パスの詩や詩論、シュルレアリスムとの関係、東洋思想や日本文学の影響を扱ったものである。筆者はパスの短編小説、戯曲、詩といった複数のジャンルの作品の中で描かれている他者について考察し、それぞれの作品における他者の働きを明らかにすることで、パスにとって他者とはどのような存在なのか、他者の探求はパスにとってどのような意味を持つのか、という問いに答えようと試みている。</p> <p>第1章ではパスの経歴やパス以前の、特にメキシコの20世紀アヴァンギャルド芸術運動を概観したうえで、アヴァンギャルドの中でも特にパスと深い関わりを持つシュルレアリスムと、シュルレアリスムに大きな影響を与えたランボーをとりあげ、パスの他者の概念への影響とパスの他者の概念との相違点を明らかにしている。</p> <p>パスが詩人として活躍する以前の19世紀末から20世紀初頭にかけてラテンアメリカでは、ニカラグアの詩人ルベン・ダリーオを中心にしてさまざまな地域でモデルニスモと呼ばれる詩的言語の革新運動が起こり、次いで、アヴァンギャルド芸術運動が登場する。メキシコにはエストリデンティスモや文芸誌『コンテンポラネオス』のグループなど独自のアヴァンギャルドが存在するが、20世紀のアヴァンギャルド芸術運動の中でも特にパスとの関係が深いのはシュルレアリスムである。</p> <p>シュルレアリストたち、とりわけブルトンや、シュルレアリスムの詩人に大きな影響を与えたランボーにとって、他者は重要な概念である。ランボーは「見者の手紙」で他者に関する考えを具体的に述べているが、その中で、自分の中にあるもうひとりの私を指すために他者という言葉を用いている。また、ランボーが自分自身を探求し未知の自分を知ることの必要性を述べ、感覚の錯乱についても言及していることから、彼の言う他者とは未知の存在であると考えられる。パスにとっても、他者とは自分にとって未知の存在を意味しており、自分自身になるために必要な存在である。しかし、パスとランボーの生に対する態度には違いが見られる。ランボーが常に「今・ここ」を乗り越え、別の場所にある生を求めていたのに対し、パスは「今・ここ」にある生と向かい合っていた。</p> <p>パスとランボーの間に見られるこの違いは、パスとブルトンの間にも見出すことができる。ブルトンは「シュルレアリスム宣言」の中で、「私とは誰か」という問いに答えるためには、あるいは私が本当の私になるためには、自我を破壊する必要があると述べている。またブルトンは、</p> |                |

生が別のところにあるとも述べている。このようなブルトンの考え方は、ランボーが自己の探求を未知の自分の探求と重ね合わせ、生を「こちら側の世界」ではなく「向こう側の世界」に見出そうとしていたことと類似している。すなわち、ブルトンの言葉にはランボー以降の近代詩に見られる「今・ここ」を乗り越えようとする姿勢が窺える。

一方パスは、ランボーやブルトンとは異なり、「今・ここ」にある生と向かい合い、「今・ここ」にいる自分自身を否定することなく、「私とは誰か」という問いに対して「私は私である」と答えている。また、パスにとって、他者との出逢いは自分を失うことなく他者を受け容れるというかたちでの他者との同化である。したがって、パスにとって他者とは自己を否定するものではなく、「私とは誰か」という問いに対する「私は私 (=他者) である」という答えの契機であり、自己を確立するためには必要不可欠な存在である、と結論づけている。

第2章では、パスにとっての他者を、身体を持つ他者と身体を持たない他者の二つに分け、主としてメルロ＝ポンティ、ラカン、大澤真幸の他者に関する考え方を援用しながら、二種類の他者の性質や両者の相違点と共通点を明らかにした上で、パスの評論『孤独の迷宮』(El laberinto de la soledad) を参照しながら、なぜそれらの他者がパスの目の前に現れるのか、また他者の存在はパスにとってどのような存在なのかを考察している。

パスにとっての身体を持つ他者は、女性、外国人、詩人ではない人といったようにさまざまな形で表現されている。身体を持つ他者はパスにとって、具体的なまさに他人として存在する人間を指しており、この場合「他者」という表現は「私とは別の人間」という意味で用いられている。私が目の前にいる他者を見つめるとき、他者もまた私として目の前にいる私を見ている。別言すれば、見る主体である私は、同時に、他者に見られる客体でもあり、見られる客体である他者は、同時に、見る主体でもある。すなわち、身体を持つ他者とは、「私ではない私」である。

一方、身体を持たない他者も、生、死、愛、言葉、書く行為といったようにさまざまな形で表現されている。私が身体を持たない他者を求めるのは、他者が私に欠如しており、私がその他者を探し求めるからである。私に欠如した他者とは言い換えれば不在の存在である。身体を持たない他者が他者であるのはその存在が不在の存在だからである。つまり身体を持たない他者の他者性はこの存在の否定にある。

これら二種類の他者には共通点がある。一つは、いずれの他者も「私とは誰か」という問いに答えるためには必要不可欠な存在だという点である。身体を持つ他者であれ身体を持たない他者であれ、他者の存在が明かすのは常に私の存在である。もう一つは、どちらの他者も否定的な存在だという点である。身体を持つ他者は「私ではない」という否定性に、身体を持たない他者は「今・ここにはない」という否定性に基づいており、また、どちらの他者も私の中に存在していない。そして、「私の中に存在していない」というこの欠如こそが他者の本質でもある。パスにとってこれら二種類の他者は、その欠如を介して「私は私である」と「私は(他者の)他者である」を成立させるために、すなわち「私とは誰か」という問いに答えるために必要不可欠な存在である、と結論づけている。

第3章では、パスの短編小説「出逢い」(Encuentro)に描かれた他者の特徴を、ボルヘスの短編小説「他者」(El otro)とベネデッティの短編小説「もうひとりの私」(El otro yo)との比較を通して明らかにしている。また詩論『弓と堅琴』(*El arco y la lira*)に見られる詩的創造や言葉に関するパスの考えと短編小説「出逢い」に見出せる私と他者の関係に着目して論を展開し、パスの言葉や詩的創造に関する考えが「出逢い」において比喩的に表現されていることを論証している。

パスの「出逢い」は、ボルヘスの「他者」と同様、私ともうひとりの私の出会いを描いた作品であり、自己の内面の探求を描いた作品である。「出逢い」における他者との遭遇は、ボルヘスの「他者」と比較すると明らかなように、暴力的である。私と他者とのこの暴力的な出会いは、パスが『弓と堅琴』の中で詩的創造を言語に対する暴力と表現していることから、詩人と言葉との出会いの比喩的表現と解釈できる。また、言葉と書く行為は詩人パスにとっての身体を持たない他者であり、パスにとって詩人と言葉の関係は私と他者の関係である。したがって、「出逢い」の主人公の私は、詩人が言葉と向かい合うようもうひとりの私である他者と向かい合っていると解釈できる。

「出逢い」の私と他者の関係が詩人と言葉との関係と相似していることは、ベネデッティの「もうひとりの私」で描かれている私と他者の関係を参照するとき一層明らかになる。ベネデッティの「もうひとりの私」で描かれているのは、一度出会ってしまった他者との決別の不可能性である。「出逢い」の私も他者と出会うことにより他者との出会い以前の私に戻ることができなくなる。このような私と他者との関係は、詩人が言葉という他者と出会い、詩を書くことによって、詩的創造以前の自分に戻れなくなるという、詩人パスと言葉との関係の比喩的表現であると言える。

「出逢い」には、パスが詩論で明らかにしている、詩人と言葉あるいは詩人と詩を書く行為との関係性に関する考えが比喩的に表現されており、パスは他者である言葉と向かい合い詩を書くことによって、「私とは誰か」という問いに答えようとしている、と結論づけている。

第4章ではパスの唯一の戯曲である「ラッパチーニの娘 (La hija de Rappaccini)」とナサニエル・ホーソーンの名の同名の小説の間に見られる三つの大きな違いに着目した上で、パスの「ラッパチーニの娘」に描かれている他者の特徴、作品の新たな読みの可能性、そして作品に描かれている他者としての受容者＝読者について論じている。

一つ目の違いは、原作ではベアトリーチェの妹として描かれている庭の灌木が、パスの戯曲ではベアトリスの兄／息子／夫である大きな木として描かれている点である。これによって、恋人というモチーフが当てはまるのは〈ベアトリス＝ファン〉のふたりだけでなく、〈ベアトリス＝紫の木〉の可能性も生まれる。二つ目の違いは、物語の最後の場面に関して、原作ではバリオーニが登場するのに対し、パスの作品ではバリオーニが登場しない点である。ベアトリスが息絶える際の台詞はベアトリーチェのそれに比べ、彼女の死が自分の意思によるものだということを強調している。そのためベアトリスは周囲の男性に翻弄されない自らの考えを持ったひとりの登場人物と考えられる。この二つの違いによって、パスの戯曲はベアトリスの視点からベアトリスと庭の木の別れを扱った作品という新たな読みの可能性を提示することができる。

三つ目の違いは、パスの「ラッパチーニの娘」にはメンサヘーロという原作には存在しない登場人物が存在する点である。メンサヘーロはファンに寄り添うかたちでファンのもうひとりの私を演じており、ファンがベアトリス(＝死)を求める様を表現している。ファンにとって、ベアトリスは女性という身体を持つ他者であると同時に、死という身体を持たない他者でもある。またメンサヘーロは作中人物ではなく作品の観客に語りかけていることから、作品の受容者としての他者を露呈する働きも持つ。したがって、パスの「ラッパチーニの娘」は死や女性という他者を描いているだけでなく、メンサヘーロの存在を通し、作品の受容者という新たな他者を提示している作品でもある、と結論づけている。

第5章では、詩作品「白 (Blanco)」の中に身体を持つ他者と身体を持たない他者の両方が表現されていることを明らかにしている。また、「ラッパチーニの娘」同様、作品の受容者としての他者を露呈している作品であることを指摘した上で、受容美学の考え方(主にヤウスの『挑発としての文学史』とイーザーの『行為としての読書』)を援用しながら、パスにとって読者とはどのような存在なのかを考察している。

「白」はその特徴的な形式からパスの詩の中でも野心的と評価されている作品である。詩は中央の列に配された詩句と左右の列に配された詩句で構成されている。中央に配された詩句は基本的に言葉や書く行為を表現しており、そこにパスの身体を持たない他者を読み取ることができる。左右に配された詩句には私ときみの関係が描かれており、女性や恋人というパスの身体を持つ他者を読み取ることができる。

この特殊な形式の詩には読み方の表が付けられており、パスはその中で、読者は詩をさまざまな組み合わせで読むことができると説明している。パスは「回転する記号」(『弓と堅琴』所収)の中で、詩に最終的な意味を与えるのは読者であると指摘しており、全集の前書きにも、読者に作品の判断を委ねると記している。つまり

「白」は、読者という作品の外側にいる他者を含みこんだ詩である。パスにとって詩とは読者に読まれるその瞬間に完成すると同時に、次の瞬間には未来の読者へと託される別の作品の草稿である。テキストが読者によって作品として完成されるというパスのこのような考えはヤウスやイーザーと共通する考えである。ヤウスやイーザーが読者の参加をテキスト作用の条件として考えているのと同様に、パスもまた詩の完成に読者の参加を必要としている。このことから、パスの詩を書く行為には身体を持つ他者としての読者の参加が含まれている、と結論づけている。

終章はまとめであり、第1章から第5章までを概括している。その上で、パスの他者の探求の特徴は、他者を追求することで明らかになるのが私の正体だということであり、パスにとって他者は、「私とは誰か」という問いに答えるために必要不可欠な存在である。パスは他者の探求を通して自己を探求していたのであり、他者という存在を介して私の存在を明らかにすることによって、パスは最終的に「私は私である」という自己の肯定を果たしている、と結論している。

論文審査の結果の要旨

(別紙2-1)

|  |                |
|--|----------------|
| 氏名   | 平山 幸乃          |
| 論文題目   | オクタビオ・パスの他者の探究 |
| 要 旨  |                |
| <p>本論文は、メキシコを代表する作家オクタビオ・パス (Octavio Paz, 1914-1998) が詩論や評論の中で用いている他者という概念をめぐるの論考である。パスは作品で頻繁に他者という概念に言及しているが、それにも拘らず、パスの言う他者とは何か、という問題を主題化して論じた先行研究は極めて少なく、パスに関する研究は、そのほとんどが、パスの詩や詩論、シュルレアリスムとの関係、東洋思想や日本文学の影響を扱ったものである。筆者はパスの短編小説、戯曲、詩といった複数のジャンルの作品の中で描かれている他者について考察し、それぞれの作品における他者の働きを明らかにすることで、パスにとって他者とはどのような存在なのか、他者の探求はパスにとってどのような意味を持つのか、という問いに答えようと試みている。</p> <p>第1章では、パスに影響を与えたブルトンとランボーの他者論を検討し、パスの他者の概念との相違点を明らかにした上で、パスは、ランボーやブルトンとは異なり、「今・ここ」にある生と向かい合い、「今・ここ」にいる自分自身を否定することなく、「私とは誰か」という問いに対して「私は私である」と答え、したがって、パスにとって他者とは自己を否定するものではなく、「私とは誰か」という問いに対する「私は私 (=他者) である」という答えの契機であり、自己を確立するためには必要不可欠な存在である、と結論づけている。ランボーとブルトンに関する箇所はもう少し詳しい考察が望まれるが、パスにとって他者とはどのような存在なのかという問いをめぐって丁寧に論じており、評価できる。</p> <p>第2章では、パスにとっての他者を、身体を持つ他者と身体を持たない他者の二つに分け、主としてメルロ＝ポンティ、ラカン、大澤真幸の他者に関する考え方を援用しながら、二種類の他者の性質や両者の相違点と共通点を明らかにした上で、パスの評論『孤独の迷宮』(El laberinto de la soledad) を参照しながら、他者の存在はパスにとってどのような存在なのかを考察している。パスの他者は、身体を持つ他者であれば、女性、外国人、詩人ではない人、身体を持たない他者であれば、生、死、愛、言葉、書く行為といったようにさまざまなかたちで表現されているが、身体を持つ他者は「私ではない」という否定性に、身体を持たない他者は「今・ここにはない」という否定性に基づいており、「私の中に存在していない」という欠如を共有している。パスにとってこれら二種類の他者は、その欠如を介して「私は私である」と「私は (他者の) 他者である」を成立させるために、すなわち「私とは誰か」という問いに答えるために必要不可欠な存在である、と結論づけている。パスの他者を、身</p> |                |

|   |
|---|
| <p>体を持つ他者と身体を持たない他者という二種類に分けて考察している点に独自性があり評価できるが、二つに分ける論拠をもう少し示す必要がある。</p> <p>第3章では、パスの短編小説「出逢い」(Encuentro) に描かれた他者の特徴を、ボルヘスの短編小説「他者」(El otro) とベネデッティの短編小説「もうひとりの私」(El otro yo) との比較を通して明らかにしている。また、詩論『弓と豎琴』(El arco y la lira) に見られる詩的創造や言葉に関するパスの考えと短編小説「出逢い」に見出せる私と他者の関係に着目して論を展開し、詩人と言葉あるいは詩人と詩を書く行為との関係性に関する考え方が短編小説「出逢い」には比喩的に表現されていることを論証した上で、パスは他者である言葉と向かい合い詩を書くことによって、「私とは誰か」という問いに答えようとしている、と結論づけている。パスの短編小説と詩論を丹念に読み込み、丁寧に推論を重ねて結論に導いている点が評価できる。</p> <p>第4章では、パスの唯一の戯曲である「ラッパチャーニの娘 (La hija de Rappaccini)」とナサニエル・ホーソーンの名義の同名の小説の間に見られる違いを指摘した上で、パスの「ラッパチャーニの娘」にはどのような他者が描かれているかを考察し、作品の新たな読みの可能性を提示している。また、パスの「ラッパチャーニの娘」にはメンサヘーロという原作には存在しない人物が登場し、作品の受容者としての他者を露呈する働きをしている点に着目し、パスの「ラッパチャーニの娘」は死や女性という他者を描いているだけではなく、メンサヘーロの存在を通して、作品の受容者という新たな他者を提示している作品でもある、と結論づけている。パスの戯曲を詳細に分析し、作品の受容者というパスにとっての新たな他者を見出している点で評価できる。</p> <p>第5章では、詩作品「白 (Blanco)」の中に身体を持つ他者と身体を持たない他者の両方が表現されていることを明らかにしている。また、「ラッパチャーニの娘」同様、作品の受容者としての他者を露呈している作品であることを指摘した上で、受容美学の考え方 (主にヤウスとイーザー) を援用しながら、パスにとって読者とはどのような存在なのかを考察している。「白」という詩は、中央の列に配された詩句と左右の列に配された詩句で構成されており、中央に配された詩句には言葉や書く行為という身体を持たない他者を、左右に配された詩句には女性や恋人という身体を持つ他者を読み取ることができることを指摘している。また、この特殊な形式の詩には読み方の表が付けられており、パスは其中で、読者は詩をさまざまな組み合わせで読むことができると説明していることから、「白」は、読者という作品の外側にいる他者を含みこんだ詩であり、パスの詩を書く行為には他者としての読者の参加が含まれている、と結論づけている。パスの詩を丁寧に分析して作品に描かれている他者を抽出し、読者という他者をパスの詩を書く行為を構成する一要素として見出している点が評価できる。</p> <p>終章はまとめであり、第1章から第5章までを概括した上で、他者はパスにとって、「私とは誰か」という問いに答えるために必要不可欠な存在であり、パスは他者の探求を通して自己を探求し、他者という存在を介して私の存在を明らかにすることによって、「私は私である」という自己の肯定を果たしている、と結んでいる。</p> |
|---|

本論文は、主題的にはほとんど取り上げられたことのない、パスにおける他者の意味をめぐって、小説、戯曲、詩そして評論という複数のジャンルの作品を対象に、具体的かつ詳細に考察しており、作品の内部に分け入ってパスの難解な思考を丁寧に解きほぐす筆者の誠実で真摯な論の展開は評価できる。

審査委員

| 区 分 | 職 名 | 氏 名   |
|-----|-----|-------|
| 主 査 | 教 授 | 井尻 直志 |
| 副 査 | 教 授 | 丹羽 隆昭 |
| 副 査 | 教 授 | 森岡 裕一 |

最終審査の結果の要旨

(別紙 3)

|   |        |
|---|--------|
| 氏名  | 平山 幸乃  |
| 試験科目  |        |
|   |        |
|   |        |
|   |        |
| 判定  | 合格・不合格 |
| 要 旨   |        |
| <p>学位申請者の研究成果を確認し、査定するために、博士請求論文を中心に口述試験を実施した（平成29年2月3日）。論文は、メキシコの作家オクタビオ・パス（Octavio Paz, 1914-1998）が詩論や評論の中で用いている他者という概念をめぐっての論考であり、パスの短編小説、戯曲、詩といった複数のジャンルの作品の中で描かれている他者について考察し、それぞれの作品における他者の働きを明らかにすることで、パスにとって他者とはどのような存在なのか、他者の探求はパスにとってどのような意味を持つのか、という問いに答えようとする試みであるが、別紙「論文審査の結果の要旨」で述べたように、従来ほとんど主題的に扱われてこなかったパスの他者という概念に焦点を当てて、複数のジャンルの作品を対象に、具体的かつ詳細にパスにとっての他者の意味を考察し、作品の内部に分け入ってパスの難解な思考を丁寧に解きほぐしている点において評価できる。口述試験においても、論文の内容に関する質問に対して的確に答えることができたと判断する。</p> <p>審査の結果、審査委員一同、申請者の論文は博士（言語文化）の学位に値すると判断し、学位授与を適格と認め、合格と判断した。</p> <p>申請者の外国語の試験については、英語とスペイン語の要約において申請者の意図が十分に表現されていると判定し、試験を免除した。</p> |        |

|      |    |       |
|------|----|-------|
| 審査委員 |    |       |
| 区分   | 職名 | 氏名    |
| 主査   | 教授 | 井尻 直志 |
| 副査   | 教授 | 丹羽 隆昭 |
| 副査   | 教授 | 森岡 裕一 |